

「人間を形容する形容詞の意義素記述」における日中対照研究

著者	大滝 幸子
著者別表示	Otaki Sachiko
雑誌名	明海大学外国語学部論集 = Meikai journal, Faculty of Languages and Cultures
巻	5
号	1993
ページ	65-80
発行年	1993-03-20
URL	http://hdl.handle.net/2297/40969

「人間を形容する形容詞の意義素記述」
における日中対照研究

A “Case” Study of Chinese and Japanese Adjectives

大 滝 幸 子
Sachiko Ohtaki

明海大学外国語学部論集 抜刷

第5集——1992

「人間を形容する形容詞の意義素記述」 における日中対照研究

A “Case” Study of Chinese and Japanese Adjectives

大 滝 幸 子
Sachiko Ohtaki

Summary

Since Fillmore (1968), much attention has been devoted to the semantic roles or “cases” that verbs project onto their argument phrases. In this study, I concentrate on the cases of adjectives. I propose to set up four adjective-relevant cases :

- ① Object of Judgment (OJ)
- ② Object of Description (OD)
- ③ Experiencer of Feeling or Emotion (EF or EE)
- ④ Cause of Feeling or Emotion (CF or CE)

Each of these cases constitutes a distinct semantico-syntactic thesaurus. If we compare Chinese and Japanese adjectives in the perspective of these cases and their thesauruses, we find various similarities and differences, which suggest that a case-based approach to the semantic structure of adjectives contributes considerably to the comparative study of languages.

	OJ	OD	EF, EE	CF, CE
Japanese	▲	○●	○	○●, ○●
Chinese	△▲	○●	○	, ○●

○ = subject-predicate structure + normal utterance

● = modifier-noun head structure + normal utterance

△ = subject-predicate structure + restricted utterance

▲ = modifier-noun head structure + restricted utterance

1. はじめに

日本語の形容詞を意味のうえから分類する場合、属性形容詞、感覚形容詞、感情形容詞と

いう分け方が通説となっている¹⁾。それに対し中国語における形容詞の分類は、朱德熙1956で提起された「性質形容詞」「状態形容詞」の区別が常識化しているといえよう。これらの分類法は形容詞と他の形式との統合形式がどのように異なるかを論拠とした説得力のある分類法である。しかしその整合性は、日本語のみを、また中国語のみを対象とした“閉じた体系内”で満たされるものであり、ほかの言語体系との比較を可能とするような“普遍的基準”として用いるには不適當である。

本稿は意義素論の分析手順²⁾に格文法³⁾の観点を取入れて、日本語の形容詞・形容動詞と中国語の形容詞・心理動詞（主に人間について叙述するもの）の意義素を一定の基準に依って比較し、日本語および中国語の教育・研究に役立てようとするものである。

2. 本稿で用いる「格」の定義

本稿では、「格」を次のように定義づける。

動詞または形容詞の意義素に含まれる弁別的意義特徴⁴⁾のうち、【他の形式】によって表されることを前提にしたグループがある。その種の意義特徴のグループは、①相当多数の動詞または形容詞の意義素に含まれる語義的意義特徴、②【他の形式】が指定する意義領域との対応関係を決定する文法的意義特徴、という二種類の意義特徴を必ず備えている。また、意義素内の意義特徴のまとめり（大滝 1975 では「意味的事項」と名づけている）のどれかに帰属させることができる。その意味的事項の名称を「格の名称」とする⁵⁾。

一般の意味的事項と異なり、格には叙述レベルでの諸特徴が定められている。すなわち、その格を表すべき【他の形式】について①文法的意義特徴とその形式（品詞、統合型など）②動詞または形容詞との位置関係（前置するか、後置するか、など）の2点が決まっている。そこで、格を有する動詞または形容詞と、その格を表す【他の形式】どの間で、形式的特徴は充すが語義的意義特徴を充さない統合がおこなわれると、文法的には問題無いが意味的にはアブノーマルな表現となる。また、格で指定された位置を崩した統合は、非文になるか、いわゆる破格の表現や強調のための前置または題目化と呼ばれる表現となる。本稿では形容詞の格を表す【他の形式】が充すべき特徴を、日中両国語とも①名詞②前置格と指定して以下の分析を進めることにする。従って中国語の区別詞または非謂語形容詞は分析の対象外とする。

3. 基本資料の構成

複数の言語を比較対照しようとする場合、基本的には意味の似通った形式どうしを比べることになる⁶⁾。本稿では中国語も日本語もおのおのシソーラス（類義語グループ）を取り出

し、シソーラス間の比較対象を行う。単語どうし1：1の比較は行わない。なぜなら、意義素の比較対象のポイントとなる示差的意義特徴⁷⁾と弁別的意義特徴とは各言語固有の意義素体系の中にあってはじめて見いだされるのであり、シソーラス内の類義語を比較して見いだされたこの二種類の意義特徴を互いに比較することが、とりもおおきく複数の言語を比較対象することだと考えるからである。もともと人間の普遍的な認識能力を反映するものとして想定された意義特徴であるが、意義素を通常の意味特徴の束として記述しようとしたならば、巨大なコンピューターの力を借りたとしても記述を完成できるかどうか危ぶまれる。「一つの単語はただ一つの意義素を表す」という意義素論の大前提を、「各言語の意義素体系のなかにあつて一つの意義素があるひとつの定位置を占める」と捉えなおして以下の考察をすすめることにする。

調査対象として取り上げたシソーラスは人の感情や感覚、様態や性質を指示する日本語形容詞・形容動詞（総数37個）からなる15種である。それに対し①“日中辞典⁹⁾と自由作文のなかで”翻訳に用いられている。かつ、②お互いが“日中辞典⁹⁾のうえて”循環論法となっている。③同一の単語で解釈が加えられている、という条件を充す中国語形容詞67個を選び出し、15種のシソーラスに配置した¹⁰⁾。単語の用例は各種辞典と用例集及び各インフォーマントが日本語用例を中国語訳した例文の中から、日本語について筆者と平松圭子氏、中国語について男女各二名のインフォーマント¹¹⁾が、日常会話で自分も使うと一致して認めたものだけに限りとりあげた。ただし、一部20歳代の語感と40歳代の語感とがどうしても一致しない部分は年輩者の語感を重視した。

語義的意義特徴を調べるための調査資料は次の手順で作成した。①一つの単語の例文として挙げられている用例が、シソーラス内の他の単語に置き換えても文として成立するかどうかをインフォーマント調査する。同一文脈内で用いられるということは、共通の語義的意義特徴が必ず有ることを示し、そのシソーラスにとっての弁別的意義特徴を探る手だてとすることができる。②「感到～、觉得～」の賓語として用いられるかどうか、インフォーマント調査をする。また「让人～」の位置に用いられて使役構文を作れるかも調査する。この調査は形容詞に人間の一時的な感情や感覚をあらわす意義特徴が含まれるかどうか、およびその感覚や感情が原則的には非自立的であり何か原因があつて生じるものであるかどうかを調べるために行った。

形容詞の文法的意義特徴を調べるための調査資料は次の点に留意して作成した。日本語形容詞については、①活用形ごとに用例を揃え、中国語訳と比較する。とくに連用修飾語については、中国語の語彙を変更する必要があるおき易く、副詞と形容詞の役割分担の違いや、連用修飾統合型の文法的意義特徴の違いが現れてくる。②形容詞に接尾辞（「がる」「そう」「げ」など）を加えて二人称三人称の主語に対する述語とした用例を検討する。特に感情形容詞について、その訳文として用いられる中国語と比較することにより、人間の内面的な動きを誰

が判断したとするのか、日中両国語の違いが判然としてくる。中国語形容詞については、①主述統合型と連体修飾統合型とを必ず対にして調査する。名詞と形容詞からなる主述統合型はなんらかの格関係と呼応する文法的意義特徴を持つが¹²⁾、その述語であった形容詞を連体修飾語とし、主語であった名詞を被修飾語とする連体修飾統合型は時に成立しないことがある。日中両国語間でその成否に異動があることから、両者の統合型に関する文法的意義特徴の違いや、形容詞が持つ格の違いを見いだす手がかりが獲られる。②同一の動詞と組合わさって「～地 Verb/Verb 得～」という2種類の統合型が使い分けられるかどうかを調査する。連用修飾統合型と述補統合型のおおのの文法的意義特徴とどう呼応するかによって、その形容詞の文法的意義特徴を見いだすことができる。

以上の資料の内、調査対象とした日本語形容詞のソーラス資料（ギリシア数字はソーラス番号）、中国語の基礎語義資料を末尾に掲載する。他の資料は随時引用する。

4. 形容詞に関する「格」の設定

日本語の感情形容詞については周知のごとく主語の人称の区別が文の言い切りの形式を左右するという特色があるが、中国語の感情形容詞にはそういう区別がない。まず主語に人間を置いた場合のこの顕著な差異から格の検討を始めることにする。

4-1. 経験者格の位置づけ

服部 一郎は時枝誠記との論争の過程で服部 1956 を著し、不定人称者・第一人称者・表現者・話し手という四種類の言語行為者を設定した。本稿では文の意味に関して四段階のレベル差を認める立場を踏襲し、以下のごとく区別をつける。不定人称者を「単語の意義素が表す外界の事物（文脈を含む）に対する判断，知覚，感情」の持ち主または行動者と定義する。不定人称者は意義素内の弁別的意義特徴を規定する。それに対し、「意義素内の格を担う形式」が表す判断，知覚，感情の持ち主は「経験者」と名付け，行動する当事者は「動作主」と名付けることにする。各々の発話時点で格を表す単語（または統合型）としてどの形式を選び取るかは，叙述の営みを行う第一人称者が決定する。第一人称者は通常話し手と一致し、「わたし」という単語によって指示される。叙述の営みとはその名のごとく，叙述内容を完成させようとする言語行動であり，個々の統合型の文法的意義特徴に基づいて単語を組合せて意義素の累積を行い，形式としての「連語」「フレーズ」意味としての「連語意義」「フレーズ意義」¹³⁾を構成する。如何なる省略が文脈の援助の元でおこなわれてもよいが，基本的に叙述内容（形式としての名称は「句」）が完成していない限り，表現者が叙述内容に対して述定を下すことはできない。

以上の観点にたつならば，日本語感情形容詞について第一人称者が主語として第一人称名

詞（わたし）を選ばなかった場合に生じる述定¹⁴⁾の下し方の変化は、以下のように整理、記述できる。

【表1】【前提・叙述から陳述へ】第一人称者が叙述の営みをおこない、叙述内容を完成する。

→表現者が叙述内容に対して述定を加える。 →話し手が聞き手に向かって伝達を図る。

(1) 経験者格として一人称名詞を選ぶ。 →表現者が自分のこととして第一人称者＝不定人称者の感情を述べる →真理基準の真と合致している。

(2) 経験者格として二人称名詞を選ぶ。 →話し手が聞き手に対して確認をもとめる問いかけを加える＝表現者として行うべき真理基準の真偽の判定を聞き手にゆだねる。

(3) 経験者格として三人称名詞を選ぶ。

① →第一人称者が情報源が別にあることを示し（「そうだ」「～と言う」など）、伝聞引用表現に変える。 →表現者はその伝聞に対し、現実基準に基づき述定をくだす。

② →第一人称者が第一人称者に属する判断形式（「はず」「よう」等の形式名詞）と統合する。 →この叙述形式は、連体修飾や連用修飾にも用いられ、必ずしも陳述を誘導するとは限らない。しかし不定人称者のレベルからじかには述定が加えられないので、第一人称者が、「私が判断した」と言明することは、表現者として真理基準に基づいて言い切るための必要条件である。

③ →第二人称者を主語とした場合と同様に、話し手が問いかけを加える。

(4) 二人称、三人称を通じて、語幹に着く接尾辞「げ」「そう」「がる」と結合させる。この結合形式は、客観的判断 or 観察結果をもとにした描写であることを保証するものであり、描写対象格を求め、主語の位置に立つ名詞を描写対象格に変化させる。描写対象格はその客観性ゆえに、表現者が現実基準に依って述定を下せる。

以上のように整理していくと、これらの言語事実を説明するために、経験者格の人称の区別について意義素内に何らかの規定（例えば、日本語の感情形容詞は第一人称を主語とする or 話し手の感情を述べる etc）を設ける必要は全くなくなる。ただし、日本語は敬語の発達にみられるように、聞き手の感情を慮ることと話し手の「自分を演出する」言語行為に関心が深く、対人関係に関する弁別的意義特徴が豊富であるために、表現者がどう述定を下したか？ をわかりやすく提示する必要ができたと考えられる。

それに対して、中国語は①イントネーション、語気を丁寧にする②使用する語彙数を多くする③文体差を日常会話の語彙と書面語の語彙の区別で表す、ことによって聞き手への丁寧さの表現とするとどまっている。中国語の陳述表現は日本語に比べて、質量ともに豊富ではないが、単用できる単語とできない単語、言い切れるフレーズと言い切れない連語との区別はやはり存在しているので、陳述のあり方に付いての検討をおろそかにするわけには行かない。また、中国語形容詞では他人の感情について文をつくるために陳述形式を変える必要はなくても、「事」「事物」についての語彙の組合せに区別はあるので、やはり経験者という

格は設定する必要がある。例えば中国語においても、事物を主語の位置に置いて人格をもたせる叙述が破格のものだからこそ、「擬人法」という修辞概念が成立していると言えるからである。

4-2. 判断対象格と描写対象格, 原因格

ところが、同じ“人”を表す名詞を主語とした形容詞述語文でも、その主語が必ずしも経験者格を表しているとは限らない。

本稿では経験者格の他、日中両国語の形容詞に次の格を設定した。

わたしは寒い。 (経験者)?? わたしは背が低い。 (判断対象)
 彼はこわい。 (描写対象) →表面からも察しがつく。
 今日は寒い。 (原因・感覚) わたしは彼がこわい。 (原因・感情)

(1) 判断対象格は「一定の判断基準とスケールに基づいて導かれた判断結果」を表す形容詞が意義素内に含む格とする。原則として反義語関係または両極端とその中間をあらわす語彙のグループをつくる。朱徳熙1956の指摘する性質形容詞、すなわち中国語の単音節形容詞はほとんどこの格を有する。日本語において同様の特徴を持つ形容詞は「語幹どうしを組み合わせるスケールを表す名詞がくくれる一対の形容詞」(例えば大小, 高低, 美醜, 好悪, など), ただし語幹部分と考える。したがって、述語になれる判断形容詞は日本語の中では特定しない。本稿では紙幅の関係で詳説をさける。

(2) 描写対象格は「一定の角度から事物の個性的特徴を捉えた結果」を表す形容詞が意義素内に含む格とする。意義素の内容としては、事物の様態を描写するものの他、複雑な感覚や感情を表すものにも含まれる。日本語の場合、形容動詞には原則として含まれる。また、形容詞接尾辞「げ」「そう」を形容詞語幹に加えると、人間を表す主語が担う格を経験者格から描写対象格へと転換させる文法的機能を発揮する。一方中国語の場合、①A B B型の形容詞やA A B B型の重畳形式(朱 1956 の状態形容詞), および“很”と統合できない形容詞②“可~”“好~”の形態素を含む形容詞に原則として含まれる。

さて、ここで中国語ではなぜ「他很高兴」(*彼はうれしい)が文として言い切れるかを考察する。基礎語義資料によると、「我很~」「他很~」ともに統合できる形容詞が20個ある。これらの単語について次の調査結果を得た。①「どうして彼が“うれしい”とわかるのか?」との問いに「やっぱり表情や態度にでるから。」との内省報告が一様であった。②表情「表情 or 面孔」と態度「态度 or 说话」を主語(描写対象格)にとる形容詞はこの20個のうち、前者は6個「快活, 愉快, 认真, 悲伤, 难过, 为难」とあるが、後者は「认真, 愉快」だけである。総じて表情や態度そのものを描写しているとはいえない。③基礎語義資料で○●をうった形容詞は8個ある。インフォーマントが「我很~」「他很~」の意味がわかれていると感じると同時に、辞典でも形容詞と形容動詞への訳しわけが行われている(シソーラス資

料参照)。前者は経験者格、後者は描写対象格と考えられる。以上の調査結果から、中国語における感情を表す形容詞は「人を描写対象格とするならば（必要条件）、経験者格をも有する。」といえよう。いささか断定的表現にすぎるかも知れないが、日本語の感情形容詞は経験者格優勢、中国語の感情形容詞は描写対象格優勢といえる。それに伴い、言い切りの述定も日本語は真理基準、中国語は現実基準が多用されていると考えられる。

(8) 原因格は「不定人称者の感覚・感情に変化をもたらす原因」を規定する格であり、感覚・感情を表す形容詞が経験者格とともに有することがある。日中両国語の感覚形容詞のうち「知覚を刺激するものを姿、形や存在箇所が確定できないものとする」形容詞には必ず含まれる。これらの形容詞に共通の形式的意味の特徴には次の3点が挙げられる。①時間詞、場所詞を主語の位置において、時間的制限や空間的制限を加えることができる。主語は格を担わず、叙述時点、叙述地点を表示する。原因は接触感をも伴なわぬいわくいいがたいものだからである。(例えば「この部屋は暖かい」「这间屋子很暖和) ②意味的には恒常的な属性ではなく一過性の状態を表す③その場合、経験者格を担うのは必ず「わたし」、「我」であり、強調(排除限定)を加える文脈以外では形式(二重主語の片一方)に現れなくなる(例えば「(私は)肩が寒い。」「(我觉得)肩上很凉」。という共通の形式的、意味的特徴が見られる。仮に「一過性感覚」と名付けておく。ただし、名詞の意義素のなかに、ある感覚をあらゆる人に与えることが社会通念として認められている場合、言い替えるならば真理基準足りうる命題を含む場合は一過性感覚としてよりも、属性の描写と捉えられる。この場合は、主語が原因格を担うと考えられる。(例えば「春は暖かい」)。

次に感情を表す形容詞について原因格の有無を検討する。日本語感情形容詞に原因格が含まれていることを表す統合上の指標は、まず基本として①人間以外の事柄・物体が主語となれる。(例えば「夜道は淋しい」「家族旅行は楽しい」「仲間はずれは悲しい) これらの統合はその因果関係が社会通念となっていると思われる。つぎに重要な指標は②経験者(人)を主題とし(～は)、原因格(人、事物)を主語(～が)とする統合型を組み立てられることである。ただし、このガ格にくる名詞はヲ格をとれないことを前提とする。

Ex. 彼が好きだ↔彼を好きだ。 ヲ格をとれるのは心理動詞とみなす。(精神対象格)
ガ格は「誰が」に应じる意味の焦点を示すとみなす。

Ex. 失敗が悔しい↔失敗を悔しがる。 *失敗を悔しい

形容詞と動詞との文法上の対立となり、ガ格とヲ格も「原因・感情」と「精神対象」を各々表している。

中国語感情形容詞が原因格を有するかどうかは甚だ疑わしい。描写対象格と解釈した方がよさそうである。前項で指摘したように中国語は描写対象格を豊富に揃える言語である。日本語は「人間がこう感じている(経験者格)→何がそう感じさせたか?(原因格)」という、人間の思惟の流れが強く働く。しかし、中国語の場合は基本的には人も描写の対象である。

そして経験者格だけを持ち、「描写対象格としての人を持たない形容詞」の方に例外としての負荷であるかの如くつぎの3つの形式的制限が認められる。すなわち、①心理動詞“感到, 觉得”と直に統合して賓語となり, その形容詞の意義素を組みたてる不定人称者は心理動詞の経験者と等しくなる, つまりその形容詞は主語にたった人間の感情をあらわす。②使役動詞「叫・讓・使+(人)」と, 「感到」「觉得」を介さずに統合できる¹⁵⁾, ③連体修飾統合型の中心語として「人=経験者格」がとれない。基礎語義資料では「高兴, 欢喜, 难受, 难过」以上4個の単語を, 中国語形容詞としては例外的に「描象対象格を持たずに経験者格をもつ形容詞」として挙げることができる。これらの形容詞においては論理叙述を旨とする形容詞に動詞が営む事実叙述が重ねられ, 一種の「一過性」の感情を表すと解釈できる。そこで, 外界と人の内面との関係づけからみれば, 中国語にとって外界の事・物の様態・状態と人間の感情との結び付きは一時的に生じるものであり, 日本語にとっては外界の事・物のある種の様態・状態は人の感情的色彩といつも結び付いているといえる。また, 叙述の営みのありかたから見れば, 中国語は語り手が自分の内面をも客観視する, つまり不定人称者と第一人称者とが基本的に別人であるのに対し, 日本語は語り手の内面が通常問わず語りについていつも真理基準を左右している, つまり不定人称者と第一人称者は基本的に同一人であるといえよう。さらに言うならば, 中国語の不定人称者は「何かをする」動作主に偏り, 日本語の不定人称者は「何かを感じる」経験者に偏っているとも考えられる。

次の例では, 日本語では「経験者格」+「原因格(感情)」がみとめられるのに対し, 中国語では, 「経験者格」しかみい出すことができない。

Ex. きょうの遠足は楽しかったでしょう? ←→今天的郊游 {玩儿得 {高兴吧。
痛快吧。
很有意思吧。

楽しい遠足←→*高兴的郊游, *痛快的郊游

让人高兴的郊游, 让人痛快的郊游

Ex. 落第するのは恥ずかしい。←→留级 {真丢人。(V-O)
应该感到害羞。

以上のことを鑑みると, 形容詞の格のうち感覚を表すか感情を表すかを区別する機能を持っているのは, 中国語における原因格だけである。原因格をもつ形容詞は感覚のみを表す。ただし, その逆は成り立たない。

5. 統合型の区別と格の表し方

前項で設定した格はすべて形容詞に前置されて主語となるが, 他の統合型に於ける形容詞の格の表し方については, 日中両国語に多くの異同が見られる。以下基本的な違いを重複を厭わず概観したのち, 統合型ごとに両者の違いを検討していく。

まず, 「統合型は, 第一人称者の叙述の営みによって組み立てられる。」とし, 統合型の持

つ文法的意義特徴をとくに「統合意義特徴」と名付けることにする。統合型を組み立てる営みが叙述の営みであり、その叙述の営みつまり単語を並べる順序そのものが統合意義特徴を表す。

統合型を構成するために活用語尾を発達させた日本語では、動詞も形容詞もその活用語尾によって統合意義特徴を表示するが、中国語動詞・形容詞に於いては基本的には統合意義特徴を表示する固有の形式をもたない。中国語では①単語の配置（前後の区別）②構造助詞の挿入によって統合意義特徴を表示する。また、動詞または形容詞の語義そのものの中にある他の事物との関係づけ（すなわち格の種類）は、統合意義特徴を支配する。

5-1. 連体修飾統合型の中心語が表す格

連体修飾の統合意義特徴は、日中両国語とも基本的には「A. 名語の意義素が指示している外界の事物を連体修飾語となる単語の意義素によって類別¹⁶⁾する。B. 中心語は連体修飾語となる単語のなんらかの格を表示する。」であると考えられる。形式と意味との関係についていうならば、形容詞の含む格（前置格）を後置すること、つまり後方へ移動する叙述といえる。ただし、C. 形容詞の意義素が「連想によって、その事物の特徴として指示する」属性を表わす、場合もありうる。この時、中心語は、形容詞の格を表わしているとはみなせない。

以上の前提にたった上で日中両国語の連体修飾統合型の異同を検討した結果、次のような形式上の違いと統合意義特徴の異同（本稿では格の異同にとどまる）を見いだした。

(1) 中国語で構造助詞「的」を用いずに形容詞と名詞とを結合する場合は、意義素の外界に対する指示関係に基づき、「名詞の下位区分」を叙述する。（例えば「长头发」「白花」「贵东西」）基本的には単音節形容詞すなわち判断対象格を持つ形容詞が元判断対象格になった名詞の修飾語になる。また、区別詞は述語に成れないが、描写対象格を持つ連体修飾語として用いられる。それに対し日本語の形容詞による名詞による名詞下位区分は多くはいわゆる漢語として「形容詞の語幹を表す漢字を修飾に用いた漢字結合」の形式となっている。（例えば「美男子」「高学歴」「賢人」）日本語の主述統合型の述語の位置にくる形容詞内の格には、描写対象格と判断対象格との区別がつけられないが（少なくとも筆者の現段階の分析においては）、連体修飾型の修飾語の位置にくる形容詞語幹は判断対象格を表すと考えられる。形容動詞語幹は実質上名詞であり、中国語の区別詞のごとく描写対象格を表すと考えられる。日中両国語ともに固定した結合であり、複合語の範疇にいてよい。なお、中国語で二音節の形容詞による名詞下位区分がないわけではない。語義基本資料の中から「～人」の例を挙げておく。

* Ex. * 长腿, 白布, 贵珍珠 (中国語) * 醜男子, 中学歴, 愚人 (日本語)

Ex. 爽快人, 热心人, 老实人, 可怜人, 狠毒人, 辛苦人, 痛快人, 窝囊人

(2) 中国語形容詞が構造助詞「的」を用いて連体修飾統合型を構成する場合は、次のよう

な点で日本語の連体修飾統合型との「格の違いに由来する統合意義の異同」を見いだした。

①中心語に位置する名詞が指示する事物を形容詞が表す性質を持つか持たないかによってグループとして類別する。これを「類別統合意義特徴」と呼ぶ。さて、他の種類の意義特徴と同様、原則として統合意義特徴は統合意義特徴どうし呼応する。朱徳熙1956が指摘するところの単音節形容詞が副詞「很～」「更～」「最～」などと統合すると、性質形容詞ではなく状態形容詞として扱うべきだという言語事実は、本稿では次のごとく解釈する。A「很～」、B「更～」「最～」と判断形容詞の統合意義特徴は、A. 判断スケールの片側への固定＝判断から描写への移行、B. 類別されたグループ内の比較結果。これらA、Bの統合意義特徴の助けを得て、判断形容詞は「的」を介する連体修飾統合型の持つ類別統合にも用いられるようになる。日本語についても、この中国語に見られるような統合の区別が見いだされるかどうか、今後検討して行きたい。→中心語が元描写対象格を表わす例を挙げる。

Ex. 易しい仕事↔難しい仕事

容易的工作, 不難的工作↔难办的工作, 很难的工作

Ex. 彼は部下に人望がある。易しい仕事を人にまわし、難しい仕事を自分がやる。

他很受下级的欢迎。 容易工作让人干, 难工作自己干。

②事物毎に文化的に固定化されている特徴的性質や事物に付随する連想（弁別的意義特徴でない場合もある）を改めて表示することによって、叙述を塗り重ねる。これを「塗り重ね統合」意義特徴と名付ける。名詞の意義特徴に由来する統合であり、主述統合型に作り替えられない統合である。→形容詞は名詞に付帯する「連想される性質」を示す。

Ex. 親しい人↔親しい友達 * 友達は親しい。

* ↔亲密的朋友（「亲密」は複数を示す名詞としか統合しない）

総称名詞「人」を類別していく場合、中国語では人間関係で類別することが少なそうである。「熟人」は類別ではなく「生人」と対になった一単語と認める。

Ex. 青白いインテリ（力がなく、弱々しいの意）？*インテリは青白い。

* →书呆子（‘専門バカ’に近い意味）

Ex. かたい誓い（壊せないの意）をたてる？*誓いはかたい。

* →信誓旦旦

③日本語における形容詞連体形の統合意義特徴は中国語に比べて外界の事物相互の関係を、意義素の組合せ方で指示できる範囲（意義領域）が広く、原因格も中心語の①につけられる。中国語の場合、感情については経験者格を持つ形容詞の動詞化をはかるか、描写対象格を持つ形容詞を使う。→元原因格（日本語）：元描写対象格 or 動詞化された元経験者格（中国語）

Ex. 気持ちのいい居間, 気持ちのいい表情 (IV)

舒适的房间 (感觉・原因格), 让人愉快的表情 (感情・経験者格)

Ex. 悲しい便り, 悲しい事故 (IX)

让人伤心的消息(感情・経験者格), 悲惨的事故(感情・描象対象格)

Ex. 寂しい幼年時代, 寂しい夜道 (XIII)

孤孤单单的少年时代, 冷冷清清的夜道(描写対象格)

让人寂寞的夜道(感情・経験者格)

④経験者格は日中両国語を通じて、形容詞の主語とはなれても連体修飾は受けられない可能性が高い。それは「感情は一時的なものであり、人間を類別しうるほど恒常的な状態にはならない」という普遍的な事実に基づくと考えられる。経験者格が中心語に据えられるのは、修飾語としての形容詞が動詞化している場合、すなわち心理動詞に含まれる(元)経験者格になった場合である。

Ex. 私はくやしい／*?くやしい私 or 人 (XII)

(我)太遺憾了!／*遺憾の人

選手達はくやし【がっている】／くやし【がっている】選手達

运动员们(感到)太遺憾了。／感到遺憾的运动员。

⑤それに対し描写対象格として人間を指示する形容詞は連体修飾統合型にも容易に入れる。言い替えるならば「形容詞に対して中心語の位置にある人間を表す名詞は、多くは描写対象格を担っていたもの」といえる。例えば、中国語に関する基礎語義資料のなかで、○●の二つの意味が統合型の種類に応じて表現し分けられていることがわかり、一方(●)が描写対象格であり、「他很～」「～的(名詞)」の両者に共通に用いられていることがわかった。代表的場面を設定して、日本語訳と対照すると、次のようになる。

Ex. 快活● 活動的で明るくほがらかだ。 ○(活動に)満足している

Ex. 快乐● 側にいて、とてもいい気持になれる。 ○満ち足りている

Ex. 痛快● 頼みごとをあっさりひきうけてくれる。 ○実に気持ちがいい

Ex. 奇怪● ふつうでないところがある。 ○不思議に思う

Ex. 踏实● することが手堅い。 ○自信がある

Ex. 窝囊● くやしくてもどうにもできない。 ○私ってなんてダメなんだろう

Ex. 寂寞● 寂しそうな様子をしている。 ○寂しい

6. 終わりに

本稿は筆者の用いる基本的な概念と方法について述べるのに紙面を多く割き、実例をたくさん挙げる余裕が持てなかった。以後の発表の機会を待って、用例を多く挙げつつ、以下の項目について順次論じて行きたい。

6. 動詞との共起が表す統合意義特徴

6-1. 連用修飾統合型

6-2. “得”字統合型

7. モードと関わる伝達意義特徴

最後に本稿での、格の用いられかたを図示して、まとめとする。

	判断対象	描写対象	経験者	原因格
日本語	▲?	○●	○	○●(感覚・感情)
中国語	△▲	○●	○	○●(感覚)

主述統合型 ○

連体修飾統合型 ●

【日本語形容詞シソーラス】 ☆=同一解釈語, ()=共通解釈部分

- | | | |
|------|-------------------|-------------|
| I | あかるい, 爽やかだ, 朗らかだ | ☆晴れ晴れしい |
| II | あたたかい, したい, 親切だ | (情け深く好意を示す) |
| III | うれしい, たのしい, よろばしい | ☆うれしい |
| IV | こころよい, 快適だ, こちよい | (気分気持ちがよい) |
| V | おかしい, おもしろい, 滑稽だ | ☆おもしろい |
| VI | 穏やかだ, やさしい | ☆穏やかだ |
| VII | 気さくだ, 率直だ | (気どり飾りが無い) |
| VIII | 真面目だ, 真剣だ, 着実だ | ☆真面目だ |
| IX | かなしい, いたましい | ☆気の毒だ |
| X | いかめしい, きびしい | ☆きびしい |
| XI | 頑固だ, 強情だ | ☆頑固だ |
| XII | 残念だ, くやしい, なさけない | ☆残念だ |
| XIII | さびしい, 静かだ | ☆静かだ |
| XIV | 残酷だ, つめたい | ☆つめたい |
| XV | くるしい, つらい | ☆つらい←→くるしい |

基礎語義資料

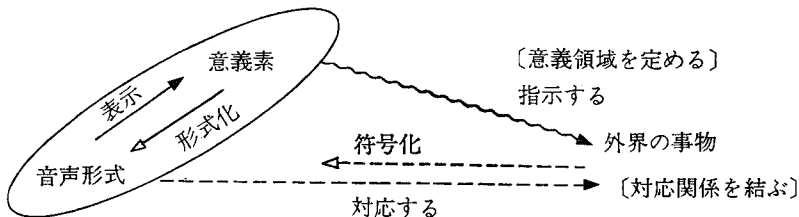
(注) △部分の注釈
 ○● 二つ意味がある場合
 ◎ 人“的”を介さない結合

V 心理動詞
 V-O 離合詞
 ?/4 インフォーマントの割合

	我很?	他很?	心里?	的人	感到?	觉得?	让人?	(注)		我很?	他很?	心里?	的人	感到?	觉得?	让人?	(注)		
I 开朗 爽朗 爽快 快活	△	○	○	○	心情			安慰	VIII 扎实 踏实 老实 认真		○						自豪		
	△	△		△				〃		△▲	●	○	●	○	○			〃	
	△	○	○	◎	○	○	○	〃		△	○	○	◎	●				〃	
	○	●	○	●	○	○	○			○	○		○						
II 亲切 热情 热心 亲热 亲近 亲密		△		●	○	○		对X	IX 凄惨 悲惨 悲伤 伤心			△							
	△	○		○				对X			○	△	△						
	△	△		◎				对X		○	○	○	○ ^{3/4}	○	○	○			
	△	△			○	○		跟X		○	○	○	○ ^{3/4}	○	○	○		V-O	
	△	△		朋友	△	○	△V	跟X											
	△	△		朋友				跟X											
III 愉快 快乐 高兴 欢喜 痛快 开心	○	○	○	●	○	○	○	南方	X 严肃 严厉 严格 严	△	○		○			△ ^{3/4}	威吓		
	○	●	○	●	○	○	○				△	○		○				〃	
	○	○	○		○	○	○				△	○		○					〃
	○	○	○		○	○	○				△	○		○					待人
	○	○	○	●◎	○	○	○				△	○		○					
	○	○	○		○	○	○				△	△		○					
IV 舒服 舒适 舒畅	○	○	○		○	○	○	心情	XII 可惜 遗憾 窝囊 窝火 可怜	△V				○	○	△V	对X		
					○	○	○				△	△	△	●◎	○	○	○		V-O
					○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	
V 可笑 滑稽 奇怪 有意思	△	○		○		△	△	自嘲	XIII 寂寞 孤单 孤独 冷清	○	○	○	○	○	○	○			
	△	○		○		△	△				○	○	○	○	○	○	○		
	△V	●		●		△	△				○	○	○	○	○	○	○		
VI 温和 和蔼 和气 和善 温柔		○		○			△ ^{3/4}	提防	XIV 残酷 残忍 狠毒 冷酷 冷淡			△	○			△ ^{2/4}	威吓		
		○		△							△	○	△	○			△	〃	
		○		○							△	○	○	◎				〃	
		○		○							△	○	○	○	○			〃	
		○		○							△	○	○	△					对X
VII 直爽 爽直 坦率 直率	△	○		○				提防	XV 难受 难过 辛苦 为难 困难 艰难	○	○	○		○	○	○			
	△	○		○							○	○	○		○	○	○		
	△	○		○							○	○	○		○	○	○		
	△	○		○							○	○	○		○	○	○		
	△	○		○							○	○	○		○	○	○		
	△	○		○							○	○	○	◎	○	○	○		

注

- 1) 『日本語形容詞の研究』1972参照
- 2) 服部1964, 国広1981参照
- 3) Fillmore, C, J 1963, 山梨1983参照
- 4) 一つの意義素のアイデンティティを確立するのに必要な意義特徴
- 5) すなわち意味的事項に対しては「格」と「格にならないもの」を区別する。大滝1975, 1987で用いてきた“格でない意味的事項”にはつぎのようなものがある。①形容詞に関するもの。判断方法(判断基準や計測方法), 判断結果, 五感変化(通常感覚などを基準とする), 感覚到達度, 感情変化(感覚を通すもの, 感覚を通さないものの区別あり)②動詞に関するもの。動作様態(視覚, 聴覚で捉えうる), 判断思考方法。本稿より“格として捉え直す”ものは, 形容詞の格として「描写対象」。なお従来, 動詞の賓語の種類として挙げられてきた項目は原則として「格」として扱える。
- 6) 単語どうしの意味が似通っているとは「複数の意義素が弁別的意義特徴の一部を共有する」こととして定義付けられる。しかし, 異なる言語間ではどう定義付ければよいだろうか? 意義素は形無き存在であり, もともと直接比べられるものではない。似ているかどうかを決定するためには, 形式を備えた単語と感覚的に捉えうる外界の事物とを関連付け, 同じ事物を同種の場面, 文脈で表現しうる可能性を探るしかない。本稿では「外界の事物を表現する」という(叙述レベルの)言語活動のメカニズムを以下の3種類の関係付けが合わさったものとする。意義素と外界事物とは, おおまかに「象徴が具象物・事柄を指示する関係」として関連付けておく。複数の外界事物に対してただ1点の象徴的特徴(その言語体系または認識体系において)が存在することが不定人称者と第一人称者に依って認められた場合, 意義素はその外界事物をみずからの意義領域に有るものとして指示する。それに対し, 形式と外界事物とは「符号が外界事物に対応する, または外界事物が符号に依って代置される双方向の関係」と捉えて区別する。この双方向の関係は, 常に多くの交錯した様相を示すが, 単語が使われるとは第一人称者によって対応と代置とに関わる形式及び外界事物が同一の組合せとして選び出されることに他ならない。形式と意義素の関係は単語内部の構造であり「記号の表示部と指示部との1:1の組合せ」に相当する。そこで, 異なった言語間で意味が似ているとは「互いの意義素の意義領域が重なっていること」「同一の外界事物が互いの形式に依って代置されること」を指すものとする。讚井1992参照



言語形式(単語, イントネーションなど)と意義素体系内の意義素の関係は, 記号と表示対象の一般的な1:1の表示関係とみなせる。しかし, 統合型と統合意義特徴の関係は記号と表示対象との表示関係ではあるものの, 構成要素となる語彙とそれが有する格や相の違いによって1:複数の関係となることが多い。(例えば劉1982で指摘された状語のM1・M2・M3の区別)

- 7) 同一の言語に属する単語と単語の意義素を区別するのに必要十分な意義特徴
- 8) 『詳解日漢辞典』1982北京出版社
『日中辞典』1986小学館, 『中日辞典』1991小学館
『岩波日中辞典』1982岩波書店
『日語常用詞例解詞典』1982外語教育出版社
『日語5000語基本詞辞典』1985上海外語教育出版社
- 9) 『現代漢語詞典』1984商務印書館
『實用漢語形容詞辭典』1990中国標準出版社
鄭懷徳, 孟慶海編『形容詞用法詞典』1990湖南出版社
『近義詞応用詞典』1987語文出版社

なお、日日辞典としては主に次の三冊を用いた。

『例解新国語辞典』1987三省堂、『外国人のための用例辞典』文化庁

森田良行『基礎日本語ⅠⅡⅢ』1978角川書店

- 10) 日本語のソーラスを基にすれば比較しようとすれば中国語の単語数がより多くなり、中国語のソーラスを基にすれば日本語の単語数がより多くなるのは当然と考えられる。どの言語でも常用単語で構成されるソーラスは経済的にできあがっているはずである。ところが、他の言語と比較してそれと意義領域の似通ったものを集めようとする、自国語のソーラスの持つ経済性がそこなわれるからである。
- 11) インフォーマント紹介。
大滝幸子 (43才) 幼年期一東京, 小中学校一名古屋大阪, 高校以後一東京
平松圭子 (61才) 東京出身, 東京在住
顧京聯 (27才, 男性) 徐曼 (41才, 女性) } 男性は北京出身, 北京在住
陽光 (23才, 男性) 王軍 (40才, 女性) } 女性は小学校時代より北京在住
- 12) 名詞, 形容詞の順に統合されていても「通常の平叙文」(前置格が前にくる, 伝達が報告を旨とするなど) でなければならない。
- 13) 「フレーズ」は, そのまま述定をかぶせられる連語すなわち独立して文となりうる連語を指すものとする。フレーズとフレーズ意義, 連語と連語意義との関係も記号と表示対象の1:1の関係を原則とする。紙幅の都合で詳説はさける。
- 14) 芳賀1954の定義による。ただし, 人間が自分の言葉に対して, 言語形式によってどのような立場表明をしようとするのかを, 述定の意味特徴とする。最も基本的な立場表明は「真とするか偽とするか」の判断表明であると考え。発話時点の現実との対照(現実基準)または表現者の信念・確信との対照(真理基準)の二通りの方法で決定されると想定する。述定の下し方の変化については渡辺1991に, 日本語形容詞に関する分析が「わがこと, ひとごと」の対立概念を用いてなされている。
- 15) 大河内1991参照
- 16) 大滝1992では「総称, 類別称, 個別称」を名詞やフレーズが外界対応を行う三段階とする。この類別統合は基本的に描写対象格の移動により表されるが, 判断対象格の移動はどう解釈すればいいか? 人間をあらゆる形容詞が少ないので, 本稿では詳しく触れないが, 類別統合の位置づけを明確にするために, 筆者の腹案のみを述べておく。中国語の判断対象格の場合は「他に対照的な性質を持つ別のグループが存在する」という統合意義特徴がもうひとつ加わる。これを「対照統合意義特徴」と呼ぶ。この統合意義特徴が文中にあると, 対照するための評価基準(スケール)を明示する形式「両極端の並列・列挙」(反義語や対句など)を用いなければ叙述内容が完成しない。これは中国語の叙述の特徴といえる。本稿では「スケール叙述」と名づけ, 文法的意義特徴のひとつとする。日本語の表現者は「わたしの位置づけ」に熱心であるが, 中国語の表現者は「わたしのスケール」を示すのに熱心だとも解釈できる。スケールを示して真理基準に合致するかどうかを述定する手順が見い出される。

参考文献

- 山梨正明1983「格文法理論」『英語学大系5 意味論』大修館書店
C. J. Fillmore 1968「The case for case」Glossa 1, pp. 91-125
服部四郎1957「ソシュールの langue と言語過程説」『言語研究』32号
服部四郎1964「意義素の構造と機能」『言語研究』45号
国広哲弥1981「意味論の方法」大修館書店
国語国立研究所1972『形容詞の意味用法の記述的研究』秀英出版
朱徳熙1956「現代漢語形容詞研究」『語言研究』1期
芳賀綏1954「陳述とはなにもの?」『国語国文』23巻4号
大河内康憲1991「使役構文と感情表現」『中国語』No. 382, No. 383 大修館書店
讃井唯充1992「語用論的具体化と一般化」『人文学報』234号都立大学人文学部
渡辺実1991「わがこと, ひとごと」の観点と文法論『国語学』165号
大滝幸子1975「中国語の形容詞の意味分析」『中国語学』222号

「人間を形容する形容詞の意義素記述」における日中対照研究

- 1988「知道，明白，懂得の意義素記述」『中国語学』235号
- 1992「中国語離合詞が提起する文法課題（その2）」明海大学外国学部紀要四集